

巻 頭 言

看護学部 元村 直靖

本年の最大のトピックスは、3月11日に起こった東北地方の大震災でしょう。地震だけでなく、その後、津波の被害にあい、さらに、日本がかつて経験したことのない原子力発電所の放射能漏れ事故が津波の結果おこっております。17年前の神戸の震災と比べると、はるかに広域で、被害も甚大でありましたし、多くの方々が被害にあわれました。被害につきまして、心よりお見舞とお悔みを申し上げます。

ところで、大阪医科大学に看護学部が設置され、早や1年8ヶ月が経過致しました。いまだ、さまざまな問題が山積されていますが、皆様のご尽力で少しずつ前進しており、誠に喜ばしい事と存じます。また、このたび大阪医科大学看護研究雑誌も第2巻を発刊することになりました。ここでは、巻頭言として、私が考える教育・研究について述べてみたいと存じます。

恩師から教えられたことですが、教育については、幅広い教育、偏らない教育が大事と考えております。看護師にとって、病気の知識が必要なことは申すまでもありませんが、臨床をする以上、病める人の心の理解など、幅広い教養も必要で、この両者を兼ね備えた看護師が求められています。すなわち、広い視点からの看護学、つまり生物学的、心理学的、社会的及び倫理的といった包括的な立場を重視した看護教育を行う必要があると思います。また、現在の高度情報社会、ストレス社会においては、将来どの分野に進むにせよこのような幅広い教養は必須のものになってきていると思われます。そのため、卒前教育では、系統講義のほか、実習などを通じて、患者さんのかかえる問題に対する問題意識を在学中からしっかり持ち、さらに、時間をとって、すぐに役に立つマニュアルではないが、とても大切な教養を深めていただきたいと思います。

一方、看護学の研究では、医学に比べて、生物学的な研究は少なく、調査研究が多いように思います。一般に、医学では論文の評価は、インパクト・ファクターやサイテーション・ファクターなどの数値によって決められます。これらのファクターが高いものが優れた論文であると評価されます。このような医学的慣習を看護学に持ちこむかは一定の議論が必要でしょうが、おそらく、近い将来、看護学の領域でも、国際水準が問われてくると思います。そのためには、ふだんから英文雑誌に目を通し、良い論文は、なるべくインパクトの高い雑誌に投稿するのがよいと思います。図書館にも、たくさん英文のジャーナルがありますが、看護学系の雑誌のダウンロードは大変少ないようです。本学においても、国際水準の良質な研究が進むことを願います。